

企画趣意と『原爆が遺した子ら』内容紹介

山本 昭宏

企画に当って、次の二点に留意した。第一に原爆小頭症の問題。第二にテレビ・ドキュメンタリーというメディアの特性である。

これまで、原爆文学研究会では、原爆小頭症の問題を正面から扱ってこなかった。もちろん、間接的には、山代巴に関する報告があり、広島文化運動に関する研究も、特に五〇年代前半を中心に深められてきた。原爆小頭症の存在は会員の誰もが知っているが、報告などで正面から扱われなかった理由は、おそらく「作品」として残っているものが少なかつたからではないだろうか。

二点目のテレビ・ドキュメンタリーというメディアについては二〇一八年から、企画の可能性を探っていた。原爆に関するドキュメンタリーのリスト、それも広島の放送局が制作してきたものをリストにできればと考えて動き出したが、何から手をつければ良いのか、わからない。そこで、東琢磨氏と大牟田聡氏、そして川口隆行氏の協力を得て、RCC中国放送の平尾直政氏を紹介していただけ、まずは平尾氏が制作された作品を鑑賞した。そのなかから今回は『原爆が遺した子ら 胎内被爆小頭児を支えて』（中

国放送、二〇一七年）を選び、第五九回原爆文学研究会で上映するという企画を立てた。上映後のアフター・トークは、平尾氏、東氏、大牟田氏の三人をお願いした。

アフター・トークの誌面化に際して、『原爆が遺した子ら 胎内被爆小頭児を支えて』の内容を簡単に紹介したい。アフター・トークのより良い理解に資すると考えるためである。なお、適宜、きのご会『原爆が遺した子ら 胎内被爆小頭症の記録』（溪水社、一九七七年）から情報を補った。この著作は、『日本の原爆記録 一四』（日本図書センター、一九九一年）に収録されており、筆者が参照したのはその版である。また、以下の内容紹介の文責は、筆者にある。

このドキュメンタリーの視点人物の一人は、RCC中国放送の記者だった秋信利彦である。秋信は、『この世界の片隅で』（岩波書店、一九六五年）に、原爆小頭症のルポルタージュ「NUTERO」を寄稿した人物だ。その際は、「風早晃治」というペンネームを使用していた。

秋信はまずA B C Cに取材を申し込むが、A B C Cの担当者は「神様だけがごんじです」という返答で、有益な情報を引き出すことはできなかった。そもそも、A B C Cは一九五一年から胎内被爆児の調査を進め、一九五二年には報告書「広島市における胎内被爆児童に発現した異常」発表していた。この報告書では、放射線の胎児におよぼす影響が記録されていたが、一九五〇年代には、原爆小頭症患者の存在が社会問題化するとはなかった。患者とその家族は、ひっそりと暮らしていたと言っているだろう。

取材を進める秋信の元に、匿名の情報が舞い込む。そこには、小頭症患者の名前と住所が記されていた。情報提供者は、A B C C労組の山内幹子だった。彼女は、当時、A B C Cで被爆者の聞き取り調査のスケジュール管理に従事しており、小頭症患者の情報にアクセスできる貴重な存在だった。

山内からの情報を手がかりに、秋信は原爆小頭症患者の家を訪れた。しかし、家族からは警戒されてしまう。家族の警戒は、ある意味では当然だった。メディアの人間は、一生責任をもって付き合ってくれるのか？ そうでないならば、関わりたくない。それが家族の反応だった。秋信は、覚悟を決め、原爆小頭症患者とその家族たちのもとに足を運んだ。

こうして、一九六五年六月二七日、「きのこ会」が発足する。会長は畠中国三。事務局は、秋信利彦・文沢隆一・大牟田稔の三名だった。「きのこ会」は、「原爆症認定・終身保障・核兵器廃絶」の三点を掲げて、広島市と厚生省への陳情活動を始めた。「きのこ会」の活動は、一九六七年九月、原爆小頭症患者たちの原爆症認定に結実する。しかし、「きのこ会」が求めていた終身生活保

障は、認められなかった。

結成から陳情活動に至る過程で、「きのこ会」にはマスコミからの取材が殺到した。しかし、事務局は、患者本人とその家族を守るため、マスコミが「きのこ会」の会員に直接接触するのを禁止する。直接接触の禁止を他のジャーナリストたちに告げるのは、自身もジャーナリストである秋信にとつて、苦渋の選択だった。当然、他の記者たちからの反発もあった。他のジャーナリストに直接接触を禁じる以上、秋信たちは、自分たちは「きのこ会」の記事にはしないと誓った。

ただし、秋信は一度だけ、「きのこ会」の会員を対象にドキュメンタリーを制作している。その作品、『面会室』（一九七〇年八月放映）では、小頭症患者の娘を施設に入れた両親に焦点を絞った。親子が会えるのは、施設の面会室のみだ。「帰りたい」と言う娘に、優しく語りかける父親の姿が印象的な作品だった。

さて、ドキュメンタリー『原爆が遺した子ら』は、東京に転動になった秋信の足取りを辿る。印象的なのは、昭和天皇の記者会見に臨んだ秋信が、天皇に質問する場面だ。一九七五年一〇月、昭和天皇が初めて記者会見を行った。秋信は、広島の記事として、天皇に対してある質問を用意していた。それは「天皇は原爆をどう受け止めたのか？」という趣旨の質問である。質問に対して、天皇は、「気の毒であるがやむをえないことと私は思っています」と述べるにとどまった。

その後、ドキュメンタリーは、原爆小頭症患者の小草信子とその父親に視点を転じる。この親子は、平尾氏が長年にわたって取材してきた二人だ。カメラは、入院した父親が、娘の信子につい

て「わしより先に死んでくれたほうがええ思う」と述べる姿を映し出す。父親が入院し、死去した後、信子は一人で生活をするが、その様子についても、カメラは克明に記録している。この親子の例が示すように、一九九〇年代以降、「きのこ会」は、親の高齢化という問題を抱えることになった。

最後に、ドキュメンタリーは、再び制作者側に焦点を移す。そこで興味深いのは、元RCCの松永英美の言葉である。松永は、取材者だった自分たちのなかに「(寄り添うこと)と(マスコミ根性)」の緊張関係があったと発言している。ジャーナリストの倫理に関わる松永の発言は、簡単に結論が出るものではなく、おそらくはジャーナリズムが抱え込む難問だろう。それに対する一つの回答として、ドキュメンタリーは秋信の言葉を紹介して終わる。「せめて記録を残してやらんと何のためにこの人たちが生れてきたんかわからんよね」という秋信の言葉がそれである。

以上が、ドキュメンタリー『原爆が遺した子ら』の概要である。概要を踏まえた上で、誌面化したアフター・トークと全体討論に移っていただきたい。